HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	候孝賢映画研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	龔, 金浪
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15243号
Issue Date	2022-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87749
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Jinlang_Gong_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：龔　金浪

学位論文題名
侯孝賢映画研究

・本論文の観点と方法

1970 年代の末から 80 年代の半ばにかけて、香港と台湾、そして中国本土において中華圏の映画界における地殻変動ともいえる新しい動きが現れた。本論は、そうした変動のひとつである台湾ニューウェーブの映画作家の代表格として現代台湾映画を牽引してきただけでなく、国際的にも極めて高く評価される侯孝賢（ホウ・シャオシェン）の作品を論考するモノグラフである。

侯孝賢のフィルモグラフィーにおいて商業映画から作家映画へ転換する時期に制作され、その作家性の確立を示す『風櫃の少年』を筆頭に、『恋恋風塵』、『戯夢人生』、『憂鬱な楽園』、『フラワーズ・オブ・シャンハイ』、『珈琲時光』、『黒衣の刺客』と、のべ七つの長編作品を時系列順に研究対象とする本論文は、侯映画の美学的相貌の具体的な解明を目指す。画面の構成や俳優の起用、演技の指導、カメラワーク、編集、衣装、照明、音楽など複数の要素にわたる点検から、侯孝賢の映画スタイルと呼ばれるものが呈する具体的な様相、およびその内的仕組みを克明に描き出す。また、その映画スタイルの変遷も視野に入れて映像論的な意義の検討を行う。総じていえば、本論文は漠然とした印象によって侯孝賢スタイルを語る従来の言説と一線を画すべく、あくまで具体性に依拠して侯映画の表現的な特徴を捉えようとする試みである。

・本論文の内容

本論文は侯孝賢の七作品をそれぞれ論考する七つの章から構成されており、その前・後に序章と終章を設ける。

序章では、先行研究を、映画創作・製作に言及するもの、社会・歴史・政治に関わる側面に着目するもの、作品の芸術表現を吟味するもの、という三つのカテゴリーに分けてそれぞれ検討したうえで、自らのとるアプローチおよび到達目標を明らかにする。

第一章では、初期の商業ベースの映画からニューウェーブ期の作品への転換を示すとされる『風櫃の少年』を取り扱う。侯孝賢のそれまでの作品との断絶ばかりを強調する

先行研究に一定の理解を示しつつも、製作方式と映画表現に見られる両者の関連性も本章では指摘される。また、監督がロング・ショットにより「静観する」ことに重きを置きはじめたことに言及しつつ、無反応の続く遅滞と突飛な行動の爆発、それらの交錯する幾つかの場面を取り上げ、凝視と行動の「間」を生きる青春そのものの属性にまで考察を拡大していく。

第二章では、ニューウェーブを経過した侯の成熟をしるす『恋恋風塵』を考察する。人物の感情の表現の分析に主眼を置く本章は、唐突な停電による悲痛な心情吐露の中断、人物間の視線のズレ、物語の中心にあるドラマティックな出来事にたいする抑制的な描写といった事象を分析しつつ、感傷とは峻別される侯孝賢的な抒情の奥深さを吟味する。

第三章では、侯孝賢の「歴史三部作」と呼ばれる作品群のひとつ、『戯夢人生』を論究する。作品の制作過程を確認したうえで、本章は、ナレーションと画面に映しだされるイメージ、この二つの相反しながらの連動に焦点を当て、先行研究が曖昧に主張してきた本作の映画的「純粋さ」につき、緻密な肉付けを行う。

第四章では、従来の侯孝賢映画のスタイルと異なる作風を見せる『憂鬱な楽園』を俎上に載せる。それまでの作品で多用されてきたロング・テイクやフィックス・ショットの代わりに本作が頻繁に用いる主観ショットやクロースアップ、手持ちカメラによる運動ショットについて分析しながら、「現在進行形」の生の捕捉、多方向に拡散する複数の出来事の同時的提示といった特徴を析出し、監督の求めていた「現代感」の相貌を明らかにする。

第五章では、上海花柳界を舞台とする清末の小説『海上花列伝』を原作に制作された『フラワーズ・オブ・シャンハイ』を取り扱う。緻密な分析が施されてきたとは言い難い本作をめぐって、監督をはじめ制作に関わった人々の証言を確認、セットや小道具との俳優身体の同調、「半拍遅れで」「振り子のように」空間を往還するカメラワークの考察から、物語や画面上事物をめぐる静謐な隠／顕力学を解析していく。

第六章では、小津安二郎生誕百年を記念して企画された『珈琲時光』を考察の対象とする。「差異を介して小津に接近する」侯孝賢の独特のオマージュを解明するにあたって、物語上、重要な出来事をあえて画面の中心から外すなど、小津作品とは異なる細部を剔抉、それとともに小津『東京物語』とは別の「東京」を、鉄道路線図とヒロインの妊娠との複合によって現代的に捉えた点を評価する。

第七章では、侯孝賢の現時点での最新作、武侠を題材とする『黒衣の刺客』を論考する。アクションの派手さや速さによって特徴づけられる武侠ものからかけ離れた本作の

画面進行の緩慢さに着目し、非アクション場面の日常性、「帳」をはじめとした事物の強調、何かの行動をしるした人物の「その後のただ静的な身体」など具体的に捉え、これらが「人を殺すことのできない刺客の物語」として企画された本作の主題と連動する構造を明らかにする。

終章では、『風櫃の少年』から『黒衣の刺客』までの侯孝賢映画の表現スタイルの変遷を整理するとともに、各作品に通底している描写の「間接性」について再検討し、全体の論考をまとめる。その傍ら、論文全体に残された課題についても言及する。